

『国民之友コーパス』に現れる一人称代名詞の計量的分析

近藤 明日子 (国立国語研究所コーパス開発センター) †

A Quantitative Analysis of First-Person Pronouns in *Kokuminnotomo Corpus*

KONDO Asuko (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

要旨

雑誌『国民之友』1887～1888年刊行分をコーパス化した『国民之友コーパス』に出現する一人称代名詞の計量的分析を行った。まず、分析の前にコーパスの言語量から資料性の検討を行い、非文学の文語文が大部分を占める資料であることを確認した。次に、非文学・非翻訳記事の文語地の文を対象資料として、一人称代名詞を抽出し、各語形の頻度を集計した。そこから、「吾人」が他の語形と比較して特に高頻度に出現することが本コーパスの特徴であり、それは無署名記事での「吾人」専用とも言える実態に起因することが分かった。また、記事単位での複数語形の共起について、特に「吾人」「余」「余輩」の関係を分析し、共起の組み合わせごとに頻度上の主従関係や用法が異なることも明らかになった。

1. はじめに

近代日本語の一人称代名詞には現代語以上に種々の語形があり、語形の消長過程や語形間の用法差の解明に研究の焦点があてられてきた。その範囲は、小説・戯曲の会話部分、落語速記、口語文典などの話し言葉の性質の強い口語文を利用して当時の話し言葉での実態を明らかにする研究(岡田 1998・房 2004・祁 2006a・祁 2006b など)にはじまり、近代雑誌のコーパスを利用して書き言葉の性質の強い文章での実態を明らかにする研究(近藤 2012・2013a・2013b)へと広がりを見せている。

本稿では、2014年9月に公開された新たな近代雑誌コーパスである国立国語研究所(2014)『国民之友コーパス』Ver.1.0を利用し、そこに出現する一人称代名詞の計量的分析を試みる。『国民之友コーパス』は、雑誌『国民之友』の1887(明治20)～1888(明治21)年刊行分である1～36号の全文をコーパス化したものである。原資料である雑誌『国民之友』は、徳富蘇峰の設立した民友社により1887(明治20)年から1898(明治31)年にかけて刊行された。主に、徳富蘇峰ら民友社社員および当時の著名知識人による政治・社会・経済・文学等の評論や文学作品を掲載する(近藤 2014, p.1)。本稿では、まずコーパスの言語量からコーパスの資料性について検討し、次に、コーパスから一人称代名詞を抽出、計量的に分析する。特に、論説・評論等の非文学かつ非翻訳記事の文語地の文に出現する一人称代名詞に注目し、記事署名の有無との対応関係や記事中での共起関係に焦点をあて、近代語の一人称代名詞の実態の一部を明らかにすることを試みる。

† kondo@ninjal.ac.jp

2. 言語量から見る『国民之友コーパス』の資料性

2. 1. コーパス要素別の言語量

最初に、コーパスの XML ファイルに付加された情報¹に基づき、いくつかの観点からコーパスの言語量を計り、コーパスの資料性について概観する。まず、コーパスは記事要素 (article 要素) と非記事要素 (titleBlock 要素) に大きく分けることができる。それぞれの延べ語数 (記号類・非日本語部分を除く) と記事数 (article 要素数) を表 1 に示す。

表 1 コーパス全体の言語量(コーパス要素別)

	記事要素	非記事要素	コーパス全体
延べ語数	1005578	1402	1006980
記事数	1250	—	1256

コーパス全体の記事数は 1256 であるが、うち 6 記事は漢文からなる本文テキストが入力対象外のもので、それを除いた実質的な記事数は 1250 となる。記事要素は延べ語数 1005578 とコーパス全体のほぼ 100% 占めるのに対し、雑誌タイトル・欄タイトル、欄や複数の記事に対する説明部分に相当する非記事要素は延べ語数 1402 とごくわずかである。

2. 2. 記事のジャンル別の言語量

次に、2.1 でコーパスのほとんどを占めた記事要素について、その内容から文学記事 (小説・戯曲・詩歌) か非文学記事かの 2 ジャンルに分類しそれぞれの言語量を見ていく。記事ジャンルに関する情報はコーパスには付与されていないので、著者の判断により分類を行った²。各ジャンルの延べ語数と記事数を表 2 に示す。

表 2 記事要素の言語量(ジャンル別)

	文学記事	非文学記事	記事要素全体
延べ語数	26195	979383	1005578
記事数	11	1239	1250

非文学記事は延べ語数 979383 と記事全体の 97% を占める。それに対し、文学記事の延べ語数 26195 は記事全体に占める割合だけでなく絶対的な量としても少ない。記事数は 11 であるが連載記事が多く、作品数としては 3 である。3 作品中、詩歌『都の花』と小説『大東號航海日記』は文語体であり、小説『あいびき』のみが口語体である。『あいびき』の延べ語数は 4639、さらにその中の会話部分の延べ語数は 988 とごくわずかであり、当時の話し言葉の実態解明を目的とした研究に堪える言語量を本コーパスのみからは確保できないことがわかる。

2. 3. 文章種類別・文体別の言語量

次に、2.2 で大きな割合を占めた非文学記事について、文章種類別 (地の文／引用)、地の文については文体別 (文語／口語／その他) に分類し、言語量を見ていく。文章種類は、quotation 要素を「引用」、それ以外を「地の文」として分類した。文体は、該当本文テキス

¹ コーパスの XML ファイルの仕様の詳細については近藤 (2014) を参照のこと。

² 分類の際、コーパスのコアデータのサンプリング作業に用いた記事の層別化の内部資料を参照した。

トの直上の style 属性値により「文語」「口語」「その他」に分類した。「その他」には属性値「混在」「項目」「韻文」「万葉」がすべて含まれる。各文章種類・文体の延べ語数と、該当文章種類・文体を1語以上含む記事数を示したものが表3である。1記事に複数の文章種類・文体が含まれる場合は、各文章種類・文体で別にカウントした。

表3 非文学記事の言語量(文章種類・文体別)

	地の文			引用	非文学記事 全体
	文語	口語	その他		
延べ語数	847385	6893	2986	122119	979383
記事数	1233	4	5	563	1239

このなかで最も大きな割合を占めるのが文語地の文であり、延べ語数 847385 で非文学記事全体の 87%を占める。一方、口語地の文は延べ語数 6893 と、記事全体に占める割合だけでなく絶対的な量としても少ない。当時の口語体の書き言葉の実態解明を目的とした研究に堪える言語量は、本コーパスのみからは十分に確保できないことがわかる。引用部分は延べ語数 122119 と文語地の文に次ぐ量であるが、古い時代の典拠からの引用が含まれており、そのまますべてを近代語の資料として扱うことはできないものである。

2. 4. 非翻訳／翻訳別の言語量

次に、2.3 で最も大きな割合を占めた非文学記事の文語地の文について、外国語を翻訳した記事のものか、それとも翻訳でなく日本語としてはじめから書かれた記事のものかで分類し、言語量を見ていく。article タグ originalAuthor 属性に拠り、属性値が空のものを非翻訳記事、何らかの値があるものを翻訳記事として分類を行った。非翻訳／翻訳別の延べ語数と記事数を示したものが表4である。

表4 非文学記事の文語地の文の言語量(非翻訳／翻訳別)

	非翻訳記事	翻訳記事	非文学記事の 文語地の文全体
延べ語数	788420	58965	847385
記事数	1169	64	1233

翻訳記事の文語地の文は延べ語数 58965 と文語地の文全体の 7%を占める。翻訳の文章はその原著の言語の影響を受けている可能性があり、厳密には純粹の日本語と区別して考える必要がある。本稿では、この翻訳記事を除いた、非翻訳の非文学記事の文語地の文を調査対象として以下の調査・分析を進める。その言語量を改めてまとめて示すと表5のようになる。

表5 調査対象の言語量

延べ語数(自立語・付属語)	788420
延べ語数(自立語のみ)	472428
記事数	1169

3. 一人称代名詞の抽出と頻度

3. 1. 調査対象の頻度

2で選定したコーパスの調査対象から一人称代名詞を抽出し、その頻度を集計する。抽出は、SUW タグ pos 属性値が「代名詞」の語を抽出し語形リストを作成、そのリストから調査対象中で主に一人称代名詞として使用されている語形を選定する方法で行った³。語形は接尾辞「等(ら)」の接続有無によって区別した。抽出した一人称代名詞の語形と、該当語形の粗頻度、自立語1万語あたりの頻度、出現記事数、出現記事率(調査対象の記事数1169に対する該当語形の出現記事数の割合)を表6に示す。

表6 調査対象に出現する一人称代名詞

	粗頻度	自立語1万語 あたりの頻度	出現記事数	出現記事率
吾人	2762	58.46	591	50.6%
余	496	10.50	119	10.2%
余輩	155	3.28	64	5.5%
我が輩	89	1.88	23	2.0%
小生	80	1.69	9	0.8%
僕	43	0.91	8	0.7%
我々	18	0.38	13	1.1%
余等	8	0.17	4	0.3%
拙者	7	0.15	3	0.3%
乃公(だいこう)	4	0.08	3	0.3%
朕	3	0.06	2	0.2%
吾人等	1	0.02	1	0.1%
乃公等	1	0.02	1	0.1%
全体	3667	77.62	738	63.1%

これによれば、もっとも高頻度の一人称代名詞は「吾人」であり、この1語形だけで一人称代名詞全体の頻度の75%を占める。このように「吾人」が他の語形から突出して高頻度であることは、他の近代雑誌コーパス『明六雑誌コーパス』『太陽コーパス』『近代女性雑誌コーパス』では見られない事象であり⁴、『国民之友コーパス』に特徴的なものである。

3. 2. 無署名記事／署名記事別の頻度

調査対象で「吾人」が特に高頻度である背景を探るため、調査対象を無署名記事と署名記事に分けて見ていく。article タグ author 属性に拠り、属性値が「*」のものを無署名記事、それ以外を署名記事として分類を行った。無署名／署名別の言語量を表7に示す。

³ 一人称代名詞としてだけでなく反射指示代名詞としても使用される「われ」、誤解析や一人称代名詞以外の用法がほとんどの「吾曹(ごそう)」「てまえ」「わし」「わたい」「わたし」は分析対象外とした。

⁴ 他の近代雑誌コーパスでの一人称代名詞の頻度については、近藤(2012・2013a・2013b)を参照のこと。

表7 調査対象の言語量(無署名記事/署名記事別)

	無署名記事	署名記事	調査対象 全体
延べ語数(自立語・付属語)	454946	333474	788420
延べ語数(自立語のみ)	273886	198542	472428
記事数	887	282	1169

それぞれに出現する一人称代名詞の語形と、その粗頻度、自立語1万語あたりの頻度、出現記事数、出現記事率を、無署名記事のものを表8に、署名記事のものを表9に示す。

表8 無署名記事に出現する一人称代名詞

	粗頻度	自立語1万語 あたりの頻度	出現記事数	出現記事率
吾人	2439	89.05	545	61.4%
余	29	1.06	19	2.1%
余輩	2	0.07	2	0.2%
我が輩	1	0.04	1	0.1%
小生	2	0.07	1	0.1%
僕	3	0.11	3	0.3%
我々	6	0.22	5	0.6%
余等	0	0.00	0	0.0%
拙者	5	0.18	2	0.2%
乃公	1	0.04	1	0.1%
朕	0	0.00	0	0.0%
吾人等	0	0.00	0	0.0%
乃公等	0	0.00	0	0.0%
全体	2488	90.84	558	62.9%

表9 署名記事に出現する一人称代名詞

	粗頻度	自立語1万語 あたりの頻度	出現記事数	出現記事率
吾人	323	16.27	46	16.5%
余	467	23.52	100	36.0%
余輩	153	7.71	62	22.3%
我が輩	88	4.43	22	7.9%
小生	78	3.93	8	2.9%
僕	40	2.01	5	1.8%
我々	12	0.60	8	2.9%
余等	8	0.40	4	1.4%
拙者	2	0.10	1	0.4%
乃公	3	0.15	2	0.7%
朕	3	0.15	2	0.7%
吾人等	1	0.05	1	0.4%
乃公等	1	0.05	1	0.4%
全体	1179	59.38	180	64.7%

「吾人」の粗頻度と記事の署名の有無との関係を見るために、表10のクロス表で χ^2 検定

(イェーツの補正あり)⁵を行った。

表 10 「吾人」の別と記事署名の有無によるクロス表

	無署名記事	署名記事
「吾人」粗頻度	2439	323
「吾人」以外の一人称代名詞粗頻度	49	856

その結果、1%水準で有意差が認められた ($\chi^2(1)=1130.97$, $p=.0000$, $\phi=0.60$)。これは「吾人」が無署名記事に多く出現していることを示す。他の近代雑誌コーパスと比較して『国民之友コーパス』で「吾人」が突出して多く出現する要因が、無署名記事での「吾人」の多用であることがわかる。さらに無署名記事の内部で見ると、「吾人」の粗頻度 2439 は無署名記事の一人称代名詞全体の粗頻度 2488 の実に 98%を占める。加えて無署名記事に出現する「吾人」以外の語形について詳細に調査すると、その多くは引用中での使用と見なせるものであったり一人称代名詞以外の用法で用いられているものであったりして、地の文の一人称代名詞と確定できるものは一層少ない。つまり、無署名記事では一部の例外を除き「吾人」が専用されていることになる。創刊当初の『国民之友』の無署名記事について、有山 (1986) に「当初の「国民之友」誌上には、民友社員が署名入りで発表した文章は少ない。無署名の社説のほとんどは、殆ど蘇峰の執筆であろうし、編集企画にも彼の指導力が大きかったであろう。(略) 大江義塾出身者は、論文執筆者としてよりも、編集実務担当者・無署名記事執筆者の役割を果たしていたと見ることができる。」とある。一人称代名詞「吾人」の専用は、蘇峰およびその指導下にあった民友社員による文章のありようを特徴付けるものであったと言える⁶。

一方で、署名記事では「余」が最も頻度が高く、「吾人」「余輩」「我が輩」等がそれに次ぐ。署名記事に出現する一人称代名詞全体の粗頻度 1179 に対する「余」の粗頻度 467 の割合は 40%と比較的高くはあるものの、「吾人」「余輩」「我が輩」等のその他の語形もそれなりの割合を占めており、無署名記事のように「吾人」専用といった状況は見られない。署名記事の著者数は異なりで 62 を数えるが、それらの著者の文章の個性が集合し、署名記事での一人称代名詞の多様性となって現れたと見るべきである。

4. 一人称代名詞の共起

ここで、一人称代名詞の語形に多様性がある署名記事を対象として、記事単位での一人称代名詞の共起の実態について見ていく。語形ごとに、出現記事数、他の語形と共起する記事数 (共起記事数)、出現記事数に対する共起記事数の割合 (共起記事率)、他の語形と共起せず該当語形が専用される記事数 (専用記事数)、出現記事数に対する専用記事数の割合 (専用記事率) を示したものが表 11 である。1 記事に複数の語形が出現する場合、各語形で別に出現記事数をカウントした。

⁵ χ^2 検定は統計分析ソフト R の `chisq.test()` 関数に抛り、 ϕ 係数は R の `vcd` ライブラリの `assocstats()` 関数に抛った。R のスクリプトの記述では竹内・水本 (編著) (2012) およびそのコンパニオン・ウェブサイト (http://mizumot.com/handbook/?page_id=515) を参照した。

⁶ 「吾人」を全く用いず「拙者」を専用する例外的な無署名記事「名代役者の手紙」(22号)が、その題名から明らかなように蘇峰・民友社員以外の人物によって (あるいは、そのように装って) 執筆されたものであることもその裏付けとなる。

表 11 一人称代名詞の出現記事数(共起/専用別)

	出現記事数	共起記事数	共起記事率	専用記事数	専用記事率
吾人	46	28	61%	18	39%
余	100	45	45%	55	55%
余輩	62	46	74%	16	26%
我が輩	22	15	68%	7	32%
小生	8	2	25%	6	75%
僕	5	2	40%	3	60%
我々	8	7	88%	1	13%
余等	4	4	100%	0	0%
拙者	1	1	100%	0	0%
乃公	2	2	100%	0	0%
朕	2	2	100%	0	0%
吾人等	1	1	100%	0	0%
乃公等	1	1	100%	0	0%
全体	180	74	41%	106	59%

ここから分かるように、全体では共起記事率 41%より専用記事率 59%のほうが高い。ただし、語形によってその値には違いがある。出現記事数上位 3 語形で見ると、「余」は専用記事率のほうが高く、「吾人」「余輩」は共起記事率のほうが高い。

この 3 語形の共起についてより詳しく見ていく。調査対象には、3 語形の粗頻度合計が 5 以上でかつ 3 語形以外の一人称代名詞が出現しない記事が 50 ある。この 50 記事について、出現する語形の組み合わせごとに、記事数と、記事中の 3 語形の粗頻度合計に対して該当語形の粗頻度が 80%以上の記事数（優勢記事数）を示したものが表 12 である。

表 12 「吾人」「余」「余輩」の共起組み合わせ別記事数

	記事数	「吾人」 優勢記事数	「余」 優勢記事数	「余輩」 優勢記事数
吾人	9	9	—	—
余	11	—	11	—
余輩	2	—	—	2
吾人-余	9	3	4	—
吾人-余輩	2	1	—	1
余-余輩	13	—	8	0
吾人-余-余輩	4	0	1	0
全体	50	13	24	3

「吾人」は出現する記事数合計 24 に対する優勢記事数 13 の割合が 54%、「余」は出現する記事数合計 37 に対する優勢記事数 24 の割合が 65%であるのに対し、「余輩」は出現する記事数合計 21 に対する優勢記事数 3 の割合が 13%と低い。「余輩」は「吾人」「余」と比べて、記事中で主たる語形として用いられるよりも従たる語形として用いられる傾向にあると言える。また、「余輩」は「吾人」と共起する記事数合計が 6、「余」と共起する記事数合計が 17 であり、「余輩」は「吾人」より「余」と共起しやすいと言える。さらに、「余-余輩」の組み合わせの 13 記事中、「余」優勢記事は 8、「余輩」優勢記事は 0 であり、「余輩」は「余」と共起する場合、主たる語形となることはない。

その「余-余輩」の組み合わせの記事について、語形の用法を文脈に沿って調査すると、

「余」「余輩」ともに一人称単数として用いられており、両語形の間には明確な使い分けがあるように見えないものがほとんどである(①②)。1記事中に「余」だけでなく「余輩」も共起する必要がある理由は明かではない。

- ① 余向に聖書翻譯完成すと題する一篇の批評文を國民之友に掲げたるに該翻譯委員の一人たる松山氏より事實相違の辨駁を爲せり、(…中略…)而して兩方を知れる余輩の批評を事實相違と斷言するは氏の爲に取らざる所なり、(21号「松山高吉氏の辨駁に答ふ」高橋五郎)
- ② 而して余輩が茲に之を附加するを快しとせざれども亦未だ全く之を除く能はざるは本國の利益を謀るに必要なりと思惟すれば駐在國の教會新聞議員を利用し他國より來れる同僚と合縱連衡するの權略是なり余は今之を最後に置きたれども今日外交の實勢は猶之を首要資格(クォーリティー、オブ、プライマレー、イムポータンス)の中より拔去るを許さざること余が悲む所なり(24号「外交術及び外交家(二)」朝比奈知泉)

他の語形の組み合わせの記事についても、語形の用法を文脈に沿って見ていく。「吾人-余」の組み合わせの記事の場合、「余」優勢記事では「余」が一人称単数、「吾人」は一人称複数として使い分けられていると考えられる記事が多い(③④)。

- ③ 然ば則ち平民政の文明を日本に誘入し東洋古來の氣風を一變するの任は吾人平民社會を除きて他に求べきに非ず自助の精神自奮の氣象此時期に於て最も缺く可からざるなり(…中略…)予不材なりと雖願くは此精神を有するの先輩に追隨して其勞の一部を分受せんことを切望する者なり(2号「平民社會の責任」島田三郎)
- ④ 然れども余の考ふる所は世人と差や異る所あり余は二十三年後の日本を以て、万事創始の日本たらしめず(…中略…)是れ吾人日本の未來を慮る者が今日に於て思慮を費すべきの一事なりと思考するなり(15号「二十三年後の日本」肥塚龍)

一方で、「吾人-余」の組み合わせの「吾人」優勢記事は3記事あるが、うち1記事は「余」が引用中の用例と見られるもので、実質的には「吾人」専用記事である。残る2記事は「余」とともに「吾人」も一人称単数として用いられていると考えられる。うち1記事では「吾人」は本文中に、「余」は末尾注中に用いられ、文章の性質に対応した使い分けが見られる。もう1記事では、著者の米国での具体的な体験談を語る場面でのみ「余」が用いられており、これも文章の性質に対応した使い分けが見られる(⑤)。

- ⑤ 吾人が私立大學を設立せんと欲したるは一日に非ず、而して之れが爲めに經營辛苦を費したるも亦た一日に非らず、今まや計畫畧ぼ熟し、時期漸く來らんとす、吾人は今日に於て、此を全天下に訴へ、全國民の力を藉り、其の計畫を成就せずんば、再び其時期無きを信ず、是れ吾人が從來計畫したる所の顛末を陳じ、併せて之れを設立する所の目的を告白するの止む可らざる所以なり、(…中略…)明治七年、余が米國より歸朝するに際し、適ま北米合衆國外國傳道會社の集會ありき、米國の紳士貴女、會する者三千餘名、余の友人にして此會に集る者頗る多きにより、諸友余を要して臨會せしめ、且つ訣別の辭を求めらる、(34号「同志社大學設立の旨意」新島襄)

つまり、「吾人」優勢記事は実質的には「吾人」「余」それぞれの専用の文章が合体して1記事になっているのであり、同質の文章中に「吾人」「余」が共起している例とは見なせないものである。「吾人-余」の組み合わせが同質の文章中に出現する場合は、③④で見たように「余」が一人称単数として主たる語形となり、「吾人」は一人称複数として従たる語形と

なる。

「吾人-余輩」の組み合わせの場合、「余輩」優勢の1記事は「吾人」が引用中の用例と見られるもので、実質的には「余輩」専用記事である。残る「吾人」優先の1記事では「余輩」が一人称単数、「吾人」が一人称複数として用いられていると考えられる(⑥)。

- ⑥ 科学とは何ぞや、実際とは何ぞや予輩之を釋て曰く「科学とは天然法の解則にして実際とは社会の現状なり」と(…中略…)斯く理論家の实际世界より退けらるるや所謂实际家なるもの恰かも強敵を千里の外に驅逐せるの思を爲し縦横己れの説を實際に試むるが故に終に吾人の社会は彼等が遊戯の舞臺と變じ私利の競争場と化して復は如何ともする能はざるなり(8号「理論實際の和解法」伴直之助)

以上をまとめると語形の共起関係について次のような傾向が指摘できる。「余」は一人称単数として主たる語形として用いられることが多く、その場合の従たる「吾人」は一人称複数の役割を、「余輩」は「余」と同じく一人称単数として言い換え表現的な役割を担う。一方で「吾人」は主たる語形としても用いられ、その場合は一人称単数用法となる。「余輩」も主たる語形として一人称単数として用いられる場合もあるが、その数は多くない。

5. おわりに

以上、『国民之友コーパス』を用いて一人称代名詞の計量的分析を行った。まず分析の前にコーパスの言語量から資料性の検討を行った。本コーパスは非文学の文語文が大部分を占める資料であり、口語文あるいは文学については十分な言語量がなく、他の資料と組み合わせる必要がある。次に、非文学・非翻訳記事の文語地の文を対象資料として一人称代名詞の抽出・分析を行った。無署名記事と署名記事では一人称代名詞の語形の分布が異なることが明らかとなった。また、記事単位での複数語形の共起関係についても分析し、「吾人」「余」「余輩」の振る舞いの傾向が明らかになった。

語形と記事署名との対応関係、語形の共起関係については本稿で新たに解明された点である。今後は他の近代雑誌コーパスについても同様の観点から調査・分析し、コーパス間の比較を行いたい。

付 記

本稿は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」による研究成果の一部を含むものである。

文 献

- 有山輝雄(1986)「言論の商業化—明治20年代の民友社—」『コミュニケーション紀要』4、pp.1-23 (<http://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/journal/communication/pdf/scom-04-01.pdf> よりダウンロード可)
- 岡田賢二(1998)「明治期の東京語における人称代名詞の研究—明治・大正期の落語の速記本にあらわれた一、二人称代名詞—」『埼玉大学国語教育論叢』2、pp.34-58
- 祁福鼎(2006a)「明治時代語における自称詞の使用実態と使用規範について」『文学研究論集』24、pp.45-61
- 祁福鼎(2006b)「明治時代語における自称詞の推移と位相について」『明治大学日本文学』32、pp.95(1)-78(18)

- 国立国語研究所 (2014) 『国民之友コーパス』 Ver.1.0、
http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/kokumin/
- 近藤明日子 (2012) 「明治初期論説文における一人称代名詞の分析—『明六雑誌』コーパスを用いて—」『第1回 コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.265-272
(http://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/files/JCLWorkshop_no1_papers/JCLWorkshop2012_35.pdf よりダウンロード可)
- 近藤明日子 (2013a) 「近代女性向け雑誌記事における一人称代名詞の分析—形態論情報付き『近代女性雑誌コーパス』を用いて—」『第3回 コーパス日本語学ワークショップ予稿集』 pp.313-322
(http://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/files/JCLWorkshop_no3_papers/JCLWorkshop_No3_39.pdf よりダウンロード可)
- 近藤明日子 (2013b) 「近代総合雑誌記事に出現する一人称代名詞の分析—単語情報付き『太陽コーパス』を用いて—」『近代語研究』17、pp.134-154
- 近藤明日子 (2014) 『国民之友コーパス』解説書 第1.1版
(http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/doc/kokumin_manual_v1_1.pdf よりダウンロード可)
- 竹内理・水本篤 (編著) (2012) 「第11章 頻度データ分析入門 人数や回数を比較するには」『外国語教育研究ハンドブック』松柏社
- 房極哲 (2004) 「近代語における一、二人称代名詞の変遷について」『日本文化學報』21、pp.1-15

参考 URL

- R <http://www.r-project.org/>